

## はしがき

人文学部長 上野誠治

日本の教育制度において、大学は高等教育に位置づけられています。そこでこれから4年間学ぶことになる皆さんは大学生、すなわち「学生」となります。それは、みなさんが高等学校までの「生徒」とは違った立場にあり、それにふさわしい扱いを受けることを意味します。では、学生と生徒の違いはどこにあるのでしょうか。『広辞苑』（第六版）によると、学生は「学業を修めるもの。特に、大学で学ぶもの」、一方、生徒は「学校などで教育を受ける者。特に、中等学校（中学校・高等学校）で教育を受ける者」とあります。一番の違いは、「修める」と「受ける」にあることから分かるように、高等学校までの勉強は多くが受動的なものであるのに対して、大学での勉学は、本来能動的であるべきものです。要するに、「修める」とは学修することであり、学習とは異なるということです。

「おさめる」という言葉には、「治める、修める、納める、収める」などの漢字表記があり、文脈に応じて使い分けられますが、共通する意味は、「混乱している事物を安定した状態にする」ということであるように思われます。高等学校までは、すでに整理・解決済みのことがらを主として習いますが、大学では、未整理で、まだ解決されていない問題に対しても主体的に取り組み、一定の「解」を与えることが求められます。4年後に大学を卒業し飛び込んでいくことになる社会は、様々な問題を内包し、まさに混沌とした状態にあります。その中でどのように生きていくか、というまさに答えのない問題に直面せざるを得ません。その時のためにも、大学で主体的に学修する4年間は、決しておろそかにすることの許されない貴重な期間であると言えます。就職するまでの、単なる猶予期間ではないことを肝に銘じるべきです。

とは言え、一朝一夕に生徒から学生になるというのも至難の業であるに違いありません。そのような皆さんが、1日も早く、人文学部の学生としての自覚を持ち、高等教育にふさわしい学修態度を身につけられるようにという思いから、このハンドブックは作られています。1年次の人文学基礎演習の際に、教科書として使用することを意図していますが、「大学とは」「人文学とは」から始まり、テキストの読み方、文献の調べ方、レポートや論文の書き方など、2年次以降も折に触れて参照できる内容になっています。皆さんが所属する人文学部とはどのような学部なのか、人文学の学修が自分の将来とどのような関わりがあるのかなど、自らの立ち位置を確認する道標ともなるものです。

大学では、これまで以上に、さまざまな文献を読み理解を深めていくことが求められます。「解」のない問題と取り組む際には、いわゆる教科書だけでは不十分で、関連する先行研究をしっかりと踏まえた上で、単なる独断とは異なる、自分なりの「解」を与えなければなりません。しかし、読んですぐ理解できるほど世の中甘くはありません。「読書百遍義自ずから通ず」という故事が示すとおり、何度でも理解できるまで繰り返し読むことが必要になります。表層的な理解のみに満足することなく、「韋編三たび絶つ」ほどに熟読をし、事の本質を探求し続ける態度を身につけ、それを是非その後の人生においても生かしてほしいと思います。

その上で、自分独自の考えをまとめ、レポートなり論文として書き上げなければなりません。昨今のインターネットの普及で、様々な情報が容易に入手出来るようになった弊害の一つとして、他人が考えたことを、安易な気持ちから、あたかも自説であるかのように偽装して書かれたレポートなどが時に散見されるようになりました。いわゆるコピペのことですが、それは剽窃であり、決して許される行為ではありません。「天網恢々疎にして漏らさず」とか、*Heaven's vengeance is slow but sure.* (天罰は遅いが確実に来る) とも言います。その場しのぎの浅薄な行為は厳に慎むべきです。

人文学部での4年間で意義あるものにするには、他でもない皆さん自身の、学修に対する真摯な取り組みが前提となります。真の意味で学び修めることによって、他では得られない貴重な4年間で、この人文学部で手に入れられることを切に願っています。